

流住西の蜜秘



Adult only





次

表紙	イラストレーション	流一本	
中扉	イラストレーション	流一本	
目次			2
こみつく (ガールス&パンツァー)		流一本	3
SS 整備士は見た (ガールス&パンツァー)		白朧	11
あとがき&奥付			



私は…
愚かだった

おっ

おほお

スポンサーの
バカ息子だと侮り
適当にあしらう
つもりが…

んじゃ
新鮮なザーメンを
再注にゆうう

んおおお

メスブタ
精子便所に
作り変えられて
しまい

このチンポと
精子からは
逃れられなく
なってしまおうと

また…
キタあ

あっ

あっ

あ…あ
ごめん
なさい

私は更に
大事なものを
奪われた





んあ♡

あっ♡

はああん♡

ほっほっほ

ケツ穴も
ま〇んこも
よくほぐれとる♡

ま...ほ...

おお♡

おお♡

むふう♡



んお

おお

やはりまほりのおんこは格別じゃな

処女の時と変わらぬキツさでち○ぽにしっかり馴染んでおる



ん
あ

そんな言葉でまほを汚さないで

あー

あん
あん

さすが西住流家元よい娘さんをお持ちですな

いやいや
褒めるべき所は
褒めませんと

なにせ
西住流を守る為に
自ら身をさし出して
くる親孝行な娘さん
なんですから

そら お前も
母親に頑張っている
ところをよく
見てもらいなさい

お…お母様
見てください
私のメス穴が
こんなにも精子で
いっぱいになって
るんです

お〇んこも
ケツ穴もお
キモチイイん
ですう

あ…あ

ご褒美に
中をキレイにして
あげなさい

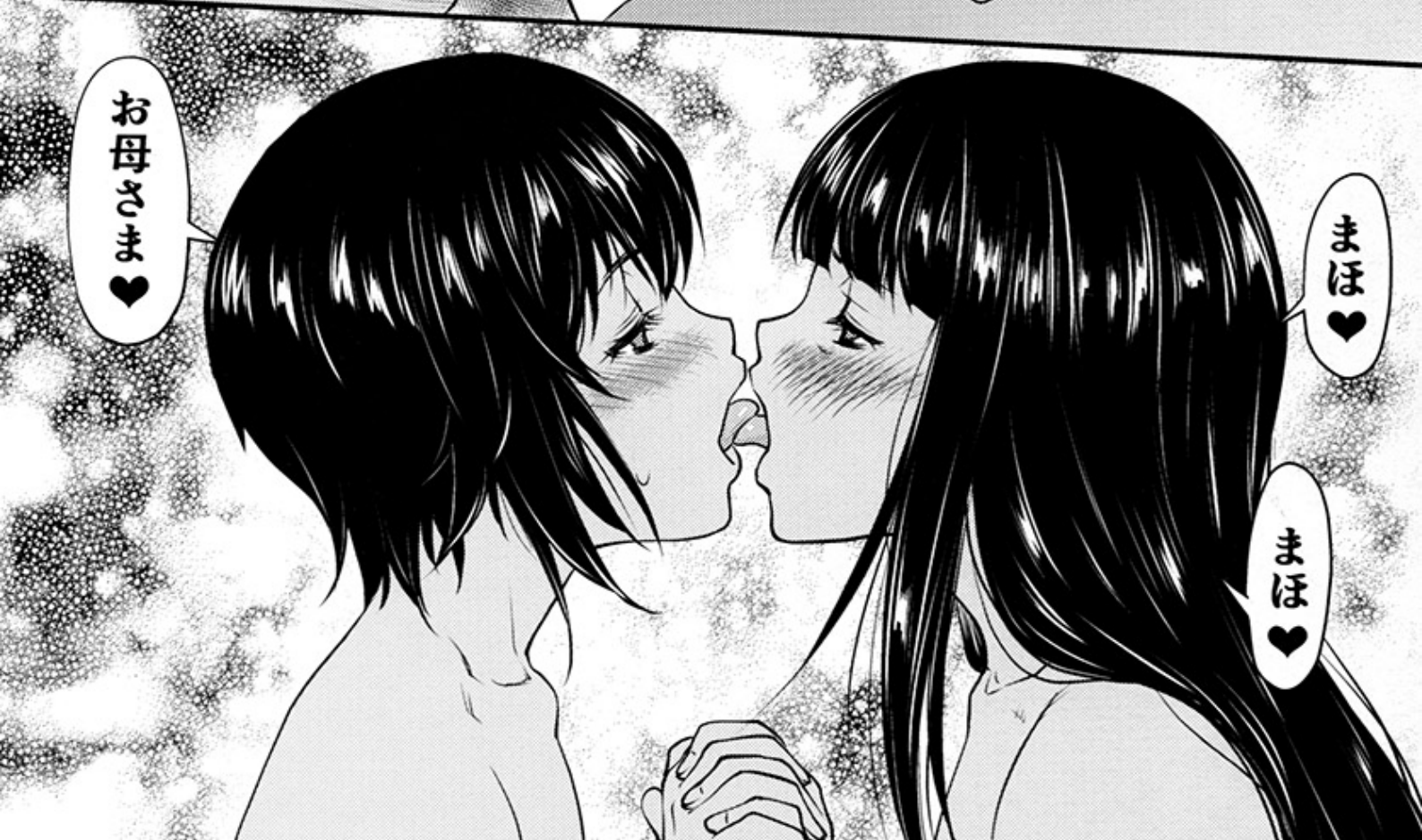
特にアナルは
中身もそのまま
なので色と臭いが
ついてますが
娘なのであれば
平気でしょう

ベロを
ストロウの
様に吸って
なさいだして

美味いか？

はい…

はい



ゴメンなさいね
まほ

私なんかの
為に...

いいんです
お母様あ♡



おっ♡

おほ♡

イグ♡

ケツマ〇コ
イグのお♡

こんなに
キモチイイ事で
西住流が安泰に
なるのなら

ああ♡

ステキ♡

今日も
おち○ぽ
下さい♡

ご主人様♡



整備士は見た

西住流で整備工として働き始めかなりの期間が経った。

「ただいま」

「お嬢様、お帰りなさい」

日課の犬の散歩から戻ってきた、家元の娘西住まほお嬢様だ。

整備工にも敬意を払って接してくれるが、少し壁を感じていたが、最近では、対応が柔らかくなったように感じる。

本日の仕事は部品搬入がずれこみ、予定外の時間になってしまった。道具の後片付けをしていると、使われていない建物になにか影が横切ったように見えた。

少し古くなった建物で、仮眠室などもあるが、現在は使われていないと聞いている。鍵も本家のほうに保管されてるから開けられない。

不法侵入かと思いい、少々危険かもしれないが、入り口をくぐり、仮眠室へと近づくと、はっきりと物音が聞こえてくる。

うめき声がドアの隙間から漏れて来ていた、女性のもののように聞こえる。このような場所に、女性を連れ込む可能性はあるのだろうか、何人かの同僚の顔が浮かび上がってくる。

隙間から不審者の確認をしてみると、一人のようだった。女性が仮眠室の寝台の上で慰めていた。

この屋敷に住まう女性は限られてしまう。たった二人なのだから。そして隙間から見える髪の長さは家元ではありあえない。西住まほであった。

隙間から見えるまほの姿は、信じられないもののように見えた。大耳をかたどったカチューシャとチョーカーのような首輪を嵌め、細いリードのようなものが見える。尻には尻尾の付いたアナルプラグが差し込まれている。床にはローター、パイプ、ロープなど、いくつも器具が転がっていた。

寝台で身悶えるまほの表情は艶かしく、吐く息も熱い。

「んッ」

まほは息を荒げ、腰をせつなく揺すり始めた。むせ返るような女の匂いが漂っている。

白い肌がほんのりと上気し、黒い下着だが映えるが、その下着はブラもショーツも局部が剥き出しになっていた。

「あ……、う……」

男は息を呑むことしか出来なかった。

まほと視線が合い、息を呑む。

ゆっくりドアへと歩いてくるまほに身動きできなかった。ドアが開かれ覗き込んでる男を一瞥する。まほは誘うように両手を広げると、柔らかな唇から男の理性を吹き飛ばす言葉を放った。

「いいよ……」

薄っすらとした体毛と恥丘、そこから蜜にまみれて勃起したクリトリスが見える。男はゆつくりと手を伸ばすと、指先でクリトリスを突く。大陰唇から愛液が零れ、濃厚な雌の香りを放ってくる。

「あッ、あんッ……、んッ……」

「はあ……、はあ……」

「さつきまで、弄っていて敏感なんだ、ゆつくりと頼む……」

「はいッ！」

まほの瞳は潤みをおび、はち切れんばかりにそそり立った男の股間に注がれたが、欲求を押し殺しゆつくりと四つん這いになる。体勢を変えたときにアナルが刺激され嬌声を漏らしてしまう。

「ああッ……、んッ……」

熱い息を漏らしながらも、まほは尻尾が挿入された尻を男のほうへと向ける。豊満な乳房が自重で垂れ下がり、腕の間で揺れている。先ほど転がってきたローターを拾い、ゆつくりとまほの膣壁にローターを押し当てた。

「ん……」

濡れそぼった膣壁はすんなりとローターを受け入れる。

「冷たい……」

夜気に晒されたローターは冷え切ってしまったようだ。まほの軀がぶるりと震えたが、その拍子に尻尾が揺らめく。その尻尾を注視してみると、根元にはいくつかのアナルビーズが残っていた。

「あッ、ああッ、んんッ」

ゆつくりと尻尾を触ると、まほのねだるような声が響いてくる。呼応するようにゆつくりとアナルビーズ部を差し込むと、尻穴に玉が音を立てて呑みこまれて行く。まほの肌には汗が浮かび震えているのが解る。

「残りも……、入れて欲しい……」

男は垂れ下がっている尻尾を持ち、軽く引くと肛門括約筋が抵抗してくる感触が伝わってきた。

「だ……、だめえッ！ んッ……、ああッ！」

指でゆつくりと外に出てるビーズを押し込んでゆく。すぼまっているアヌスが押されて開きビーズを呑み込んで行く。

まほの吐く熱い呼吸音とビーズを飲み込む音だけが静寂の中に広がっていく。

犬のように息をはくまほにタイミングを合わせてさらに残りを押し込んでいく。引き締まった尻が力んで震えていた。

「うッ……、く、苦しい……、んッ」

まほは四つん這いの姿勢を保つことが出来ず、腕を折り曲げ、額

を床につけ、ビーズの圧迫感に耐えている。

「んッ……、んッ……、はああッ！」

やがて圧迫感を乗り切ったまほが、男へとリードを差し出した。差し出されるままに受け取って、惚けた男を尻目に、まほはゆつくりと四つん這いで歩き出した。男ははっと気付いたようにまほの横に並んで歩く。

「あッ、あああッんッ、うッ……、ううッ」

アヌスと膣に玩具を入れた彼女は千鳥足で歩くと、尻尾が揺らめいて肌とのコントラストが艶かしく映える。

室内を軽く一周したところで、まほの軀が崩れ落ちる。まほは全身を震えさせ耐えていたが、気付かず歩いていた男のリードが引く張ってしまう。

「だ、だめッ！ ああああッ！」

それが引き金になったのか、まほの膣壁からローターが飛び出て、溢れた蜜が床に散乱する。

「あ……、ああッ……」

まほは名残惜しそうにローターを見て、よろよろと立ち上がった。アヌスに入れてあるビーズが直腸壁を刺激し、顔をしかめて、軀を硬直させ排泄感をやり過ごす。

興奮し、嗜虐心が膨らんだ男は、近くにあったロープで、後ろ手にして手首にロープをかけて結び、もう一本のロープで乳房の前後を縛り上げて固定する。上半身が前のめりになり、乳房がいびつに歪んで押し出していた。

まほは全く抵抗せず。男の欲望に身を任せていた。

「はあ……、はあんッ」

そのままローターを再度挿入し、子宮口に密着するように指で慎重に押し込んでから、スイッチを強の位置へとずらす。

「あああんッ」

まほの舂は痺れたように震え始めた。

「うッ、うああッ、んッ……、んんッ！」

ローターの無機質な振動で子宮ごと舂を揺すられ、肛門括約筋が蠕動している。

「あうッ、ううッ……、んんッ、んッー！」

まほは、足を組み替え、腰を捻り、白い喉を晒して、淫猥なダンスを踊りながら甘い悲鳴をあげている。

興奮で赤く染まった乳首が勃起して、大きく膨れているのが見て取れた。股間は愛液で溢れ、床には潮吹きによって液溜まりが出来ていた。

「ああッ！」

ローターが膣壁からこぼれ落ち、まほは大きな声をあげる。床に転がったローターはそのまま蠕動を続けていた。

まだ蠢いているローターを拾い上げ、スイッチを弱に切り替えてから再度膣へと挿入する。

「あッ、ああああッ……、ううッ」

振動が弱くなったローターは、単調な振動で子宮を揺さぶつてくるたびに、お尻の穴に力が入り、peesが直腸壁を刺激する。

甘い苦痛から逃れたくて足を踏み替えて悶えると、乳房を締め付けているロープが食い込み苦痛を与えてくる。

単調な刺激に慣れはじめてくると、強烈に子宮の疼きが襲ってくる。精液を求めて訴えてくる。

男はまほの顔を覗き込むと、勃起した乳首を指先で弾く。

「あッ、あああッ、あんッ！」

嬌声を上げ、舂を震わせるまほに対し、手に持っていた鈴付きのニップルリングの一つを乳首に挟んだ。

「あああああッ！」

痙攣のように全身を震わせ、口元からはよだれが垂れ落ちてい

た。恐ろしく淫猥で恍惚とした表情だった。

乳房が前後に撓んで揺れるたびに、付いている鈴が鳴り響くと、全身を反らして伸びあがった。

太腿の内側が大量の愛液で溢れ、床に新たな液溜まりを作る。しばらく弛緩したのちに、ゆっくりと眼を開く。

男はもう一つのニップルリングを乳首に近づける。

「あッ……、あ……」

まほの顔の浮かぶのは恐怖と期待だった。そしてもう片方にリングが勢いよく嵌められた。

「んんッ！ んッ、はあはあ……、んんッー！」

さほどより痛みはなかったが、末端が氷のように冷え、すぐに熱くなり脈動が激しく打つ。

「あ、熱いッ！ あああッ！ あつッいッ」

乳房を揉みたくても、後ろ手に縛られているので叶わない。

「んあッ、はあはあッ」

静止など出来なくて、体を揺さぶり、乳房を前後に揺すって悶えたと、繩が食い込み甘い刺激を生み出していく。足を組みかえるたびに尻穴に沈んだpeesが直腸で動き、全身から脂汗が吹き出していく。

「あああッ、んッ……、んんッ」

舂を激しく動かし、大量に溢れた蜜液も相まって、膣から滑り落ちたローターが床へ転がった。

「あ……、あ……、ああッ！」

名残惜しそうにローターに視線を送るが、その視線は男の股間へと向けられる。

「も、もう……」

男はまほに近づき、乳首に舌を這わそうとしたが、邪魔になるリングがあった。自身で嵌めたにも関わらず煩わしくリングを取り

去る。

「あッ！」

リングを外した乳首は、形を歪め、赤く染まっていた。乳房を持ち上げるように捏ねてから、乳首を舐り始める。

「んッ……、ああッ、だ、だめえッ！」

赤くなった感部を舌によって宥めていたら、鋭敏になった感覚が刺激されて、まほの軀は震え始めた。

「い、い……、イクッ！」

まほの腰が突き出されるように背が反り返り、愛液が溢れメスの匂いが溢れてくる。

「ひくッ！」

まほののどが鳴り、口の端から涎が垂らしながら、熱い呼気を吐き出す。

男は反り返ったペニスを取り出すと、絶頂直後でふら付いているまほの片足を持ち上げ、男根を下からあてがった。

尻穴にはまだビーズが入ったままだ。

「ほ、欲しいッ、おちん●ん入れてえッ！」

まほは嬉しそうに腰を回しながら、狙いを定めるように腰を落とすしていく。アナルビーズが挿入されたままのため、膣口が狭くなっているが、強引に亀頭で膣口を広げる。亀頭がゆっくと膣口を押し広げ挿入されていく。

みっしりと合わさった襞を掻き分けながら奥へ進む。アナルの中でぐりぐりとビーズが動き、膣壁と直腸壁を隔てて感触が伝わってくる。

「うッ、ううッ、ああああッ、だ、だめえッ……、く、くうッ、んッ！」

まほの軀が苦痛から逃れるために暴れ始めた。

直腸のビーズが異物感出していて、気持ちよく男根をピストン出

来ない。ペニスを浅い位置に挿入したまま、尻尾に手を掛けると引張った。

「ああああッ！　だめッ！　だめえッ！　で、でちゃうッ！　ひッ！」

力ずくでビーズを引っ張ると、膣に浅く挿入しているペニスが膣壁越しに擦られていく。

「ひッ、ひゃッあんッ！」

苦しげな悲鳴だが、まほの顔は恍惚の表情を浮かべていた。

取り出したアナルビーズは床へ放り投げる。

ずつと尻穴を苦しめていたビーズが取り払われ、枷が外されて気分になり、解放感でまほはため息をついた。

男は解放感に浸っているまほに対して、下から浅く挿入していたペニスを、勢いよく奥へと突きこんだ。ペニスは奥へ奥へと侵入し、子宮口を押し上げてようやくややく止まる。

「ああッ！」

まほは不意打ちの刺激に仰け反った。

「ふ、深いッ……、こ、壊れそうッ」

温もりを求めて抱きしめたいのに、両手は後ろで縛られていた。倒れないようにロープで支えられてはいるが、片足とペニスだけで維持しているような不安定さがあった。

全体重がペニスに掛かっているのではと思えるほどに、奥深くまで挿入されている感じがした。

子宮口が絶え間なく押し上げられ、亀頭で擦られているのは、軽く達してしまいそうな快感だった。

「キ、キツイッ、し、締まるッ！」

ローターの振動で子宮は今まで以上に感じやすくなっていて、深すぎる挿入に甘痛く脈動し、まほの軀を揺さぶった。

「あッ、ああああッ、いいッ」

身長差で、子宮がペニスで押し上げられる。まほは少しでも結合を緩めようとして、床に着いていた足を男の腰に絡めた。

「はあうッ、んんーッ！」

その結果、自身の体重がかかり、子宮がさらに深く押し込められ、振動でロープが乳房に食い込んでゆく。

体勢が崩れそうになるのを、太腿に腕を絡めて支えた。駅弁スタイルに似たような体位になったが腕が使えない分結合部にかかなり負担がかかった。

バランス悪い体位に、突き上げられた子宮が悲鳴をあげる。クリトリスが陰毛で擦れ、乳房に食い込むロープの苦痛と、ニツブルリングで締め付けられた乳首、それぞれが別々の苦痛と快感を与えてくる。

まほの脳裏に小さな火花が飛び散り、舐に痙攣が走る。

「イクーッ！」

まほは何度目かの絶頂を迎え、脱力した舐を預けるよう倒れこんだ。

「うッ、うーッ！」

まほの絶頂をやり過ぎすと、男は太腿に絡めた腕に力を込め、上げて落とすを繰り返した。

「ああああーッ、だ、だめッ、いやッ、こ、壊れるーッ！」

まほの体重が掛かるから、龟头が子宮に激しく当たる。ペニスの子宮口を貫かれるような錯覚を感じさせる。膣奥が熱く硬く滾ってくる。

「や、やあああッ、ま、またッ、んんッ！」

まほは絶頂の痙攣に絶え間なく襲われ、口端から涎が垂れ、陶酔の表情を浮かべている。

悲鳴をあげるまほを見ると、嗜虐心が加速する。

「い、いあやあッ、やめてッ！」

まほの凜々しい顔が泣き顔に変わり、唇を震わせて、まなじりから涙が零れる。

「うッ、ううッ、ひつくッ、も、もう……！」

十回以上繰り返すと、射精が始まった。ドブドブッ！

男はまほを押し上げた状態のまま、子宮に直接精液を注ぎ込むつもりで射精を続けた。

まほの泣き顔が、深い恍惚に変わっていく。膣壁が振れながら締まる。

「イクーッ！」

射精の途中でペニスを引き抜き、まほの下腹部に精液を撒き散らす。

首輪と犬耳で飾りつけた白い裸体を、精液で汚すのは背徳感を満足させる光景だった。結合部からは溢れた精液が太腿と伝って零れ落ちる。

ゆっくりと縛っているロープを解き、まほの体を横たえた。白い肌に赤いロープの痕が残る。

「うッ……！」

しばらく時間が過ぎると、まほは眼を覚ます。

周囲の状況を確認して、男にゆっくりと口付けをし、可愛い仔犬のような仕草で頬を摺り寄せてくる。

「わん♪」

終幕

あとがき (&グチ)

くろうさぎ このたびはお買い上げありがとうございます。
白朧 ドラクエ11は終了しました。
流一本 引越しは終了しました。
白朧 Fate/stay night [Heaven's Feel] の第一章観てきました。
くろうさぎ ガールズ&パンツァー最終章は？
流&白朧 まだですね。
白朧 近所の劇場ではやってないし12月公開では厳しいモノがありま
すわ。
くろうさぎ はよ、観にいったこい。
流&白朧 サー、イエッサー！
白朧 アニメ映画展開増えてきたので、興行収入チェックすることが多
くなってきた。
くろうさぎ マンガ実写化多いよね。アレとかアレとか・・・。
流&白朧 まあ、・・・ねえ。

12月某日
時渡りの迷宮は終了しました

奥付

発行 リーフパーティー
発行日 2017/12/31
改定日 2018/05/06
発行人 くろうさぎ

ホームページアドレス

<http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/>

印刷所 大陽出版様

18歳未満の閲覧禁止・無断転載

インターネットなどへのアップロード及び公開の禁止



LeLe!まぐま

VOL.32α